

青髭 1 7

明宏訊

「みなさん、そろそろ小腹が空きませんか？」

食事もろくにとらずに出立すると、主君たる、カルッカソム伯爵は言うのである。とうぜんのことながら、ギュスターブ・ペリゴールには17歳の美少女に見えるはずだ。

伯爵は二人に袋を見せながら付け足す。

「たんまりといただきましたわ……道々、食べましょう……」

「……………」

どうやら、アンリの主君は女のふりがうまくなってきたとみえて、いや、むしろ、家臣を辛かうことに楽しみを見出しているようにすらみえて、演技もかなり板についてきたようだ。

それにしてもどうしてそうまでして急がないといけないのだろう。視野の限界に、ギュスターブが馬に飛び乗るのが飛び込んでくる。どうして、なかなか慣れた動きではないか。彼が名づけたところによれば、タレイランは、馬としてかなりの品格を備えているようにみえた。それをああまでまともに操るとは、それに伯爵が気に入ったところをみれば只者ではない。どうやら、自分には人を見る目がないのかと、アンリは忸怩たる思いに駆られるのだった。

17歳の美少女、もとい、伯爵はアンリとギュスターブに食糧の入った袋を投げ渡した。中身はとチーズとパンである。おもえば、この程度の食糧と宝石、それに金貨を手ぎょいエンヌを逐電したものだ、変な感慨におそわれた。あれは、ほぼ発作的な家出だったのだと、今になってみれば振り返ることができる。

何かわけのわからない欲求というか、声によって首府ナルボンヌに導かれたのだ。だから、法から逸脱する行為も道々、封印したはずの青い血を復活させたりして、平気で行ったものだ。しかしながら、青い能力をあらわに使うわけにはいかなかった。そんなことをすれば家族の者、つまりは追手に、今、自分はここにいますよと宣伝しているようなものだし、べつの目を引く恐れは、すでにあの時代で常識になっていた。啓蒙思想は感染症のように地方にまで広がっていたし、若さの故というか、彼もまたそれに罹患していたからである。

啓蒙思想の何たるかは書籍によってそれなりに通じていたが、その震源地たるナルボンヌに身体を運んで体感してみたかった、というのはあくまでも修辞法であって、建前にすぎない。老人になって己の死を直観するまで生きられるのかわからないが、そうやって文章によって人生を振り返ることがあればそのように書いてみたい、とはおもう。

口に入れたチーズはほのかにナルボンヌの味がした。

アンリはべつに極端な運命論者というわけではないが、少年のころの逃避行も、今回の夜行もまた何か見えぬ力に導かれている、というただ一点においては同一のように思えた。いま、フクロウが満月にはまだ遠い月を横切っている。

もしかしたら、あの鳥が導き手だろうか。ナルボンヌにも伝承というのが残っていて、どういふつもりであんな書物を本屋で手に取ったのか、よほど、啓蒙に関する書籍に食傷していたのだろう、または小説の世界に身を浸す気分でもなかった、そんな時に手にしたのが『フクロウ、ナ

ルボンヌにおける伝承』だった。文字通り、古くはミラノ帝国時代からのフクロウに関する伝承を集めた本だった。ミラノ人たちから蛮族だとさげすまれていた、ナント人の先祖が最期まで死守したのがナルボンヌの土地だという、あくまでも、ルイ・ルブランという作家の筆によればだが、そのせいで、エウロペ大陸のほぼ全域に広がっていたフクロウ信仰が唯一、かたちとして残存したのが、王都の地だというのだ。

歴史に対する興味は人並み以上にあるものの、歴史に関してそれほど造詣が深くないアンリにとって、その詳細はどうでもよい。ただ、自分の赴くべき道をそのような伝承に任せるほどに彼の未来は濃い霧のむこうにあった。しかし、今回のことはカルッカソム伯爵の発案である。だが、そのように理由がはっきりしていても、見えざる運命の手を否定するわけにはいかない。

その時、閃光が闇を貫いた。同時に伯爵の声が響いた。

「フクロウが教えてくれた…ペリゴール、いま、光の矢が飛ぶのを見たか？」

「はい…」

「その方向に、野兎がたむろしているはずだ、捕まえてきなさい」

主君が命ずるとギュスターブ・ペリゴールは下馬するなり闇に姿を消した。それを確認してからアンリは口を開こうとしたが機先を制された。

「大丈夫だ。この程度ならばナルボンヌまで届きはしない」

「あれは小鹿ですね、かわいそうに、フクロウの夕食、いえ、この時間なら夜食でしょうか、それを奪ってしまって……」

いかにも悔しそうにあさっての方向に飛び去っていったフクロウの姿が脳裏に刻まれている。アンリは呆れ顔で言った。しかし、自分もまたエネルギー不足を自覚しはじめていた。パンとチーズだけの夕食ではどうにも小腹が空いてしょうがない。それゆえに、フクロウが月を背景に影を浮かび上がらせたとき、獲物を射程に入れたことに気付いたのだ。おもえば、ミラノ人たちは小鹿料理が好物だった。

「アンリさま、捕まえてきました」

ギュスターブが振り上げた小鹿の胸には、小さな穴が見受けられた。伯爵が放った閃光が急所を貫いたとみえる。おそらく、即死であってまったく痛みは感じなかつただろう。

小鹿の調理は伯爵自らの手で行うと思っていたアンリの予想はもろくも崩れた。

「そなた、三人分の焼き肉を作れ。わ、私がですか？……」

またもや、「伯爵」という単語を飲み込むとギュスターブから獣を受け取ってその毛を毳ろうとした。

新人の召使いは言った。

「そのようなお仕事は、わたくしのような卑しい人間にお任せください…実は村でもこういうことは得意だったんです」

そういうと、彼の手が光ったかと思うと、小鹿は瞬く暇もなく赤身を剥き出しになっていく。アンリは、自分の自制心に感動していた。なんとなれば、ギュスターブを怒鳴りつけようとしていた

からである。しかし、それは叱責する目的ではない。ふと主君の端正な横顔をみると、彼は意味ありげに微笑している。そうか、すべてはお見通しだったのか……、アンリは、皮剥きに夢中になっているギュスターブの長い顔を見下ろしながら、彼の肉親と名乗る人物の顔が彼とまったく似ていなかったことを思い出した。

どうも、自分の周囲がつねに仮面を被っている。だが、この男がとんでもない名家の出身とは思えない。ただ、青い血の持ち主であることは事実のようだ。

「そなた、村でもこんなことをやっていたのか？」

「いえ、おじじがみんなの前ではやっちゃだめだって、言ってました。だから、商品の納入の期日が近づいているのに、職人が怪我して、村がぶつつぶれるような危機があったんですが、おじじに言われて、ひそかに蔵に忍び込んで、わたくしがやりました」

「そんなことがあったのか、ほら、貸してみろ」

月に照らしだされて、小鹿は健康的な赤に輝いていた。完璧な仕事だった。毛、ひとつついていない。これほどの短時間に赤い血の人間が刃物も持たずにこのようなことが可能なはずがない。それに、彼が能力を使うときに見せた波動はあきらかに青い血の持ち主特有のものだ。伯爵はそれ以前に気づいておられたのだ。

しかし、どこの家門のものだろう。

受け取った鹿肉に手のひらから発した炎を当てながら思った。

「ヒャア……! 貴族さまはみな、すごいですね! まるで神様！」

新しい能力の使い方を教えられた子供のように、ギュスターブは小躍りする。どうやら、彼は自分の身分に気づいていないようだ。だが、「おじじ」とやらは知っていたのではないかと推察される。

弟たちのことをアンリは思い出した。母親や姉に内緒で許されていなかった能力を教えたのだ。子供らしい考えだが、二人よりも優れていることを見せびらかしたかったのだろう。

幼少時代のギュスターブもきっとアンリと同じように自分の能力を大っぴらにしたかったにちがいない。それを制御するのは「おじじ」とやらも骨が折れたにちがいない。

「塩なんてないですよ、思い浮かべましょう……」

肉の一握みを伯爵から手渡しされながら、細長い顔の持ち主は言った。青い血の持ち主は想像することで物質を具現できる。あくまでも、それは感覚レベルの話であって、じっさいに身体が必要とする塩分を補給しなくては、赤い血よりもはるかに耐久性において優れてはいるものの、いずれ死んでしまう。

だが、塩分が身体にとって必要量を維持しているときは、心がそれを要求しない。いいかえれば、食卓にそれが乗っていないときは想像で間に合わせることは、文字通りの意味で可能なのだ。

以上のようなことは、啓蒙思想家とやらが新しい学問によってあきらかにしていることだが、アンリなどはまったく無駄な仕儀だと考えている。それが正しいか、どうか、ではない。自分たちの営為に必要なだとはとうてい思えないのだ。

食事をしながらしばらく三人で歓談した。

美少女、もとい伯爵は相当にギュスターブ、彼はペリゴールという音を好んでそう呼ぶが、彼を気に入った様子で、育った村の様子は親族のはなしなどいろいろと質問をぶつける。

「青い血の方々が、われらのような卑しいものにそれほど興味を持たれるとは不思議なことです」

「そなたたちの手でしか食料を産することができない。それは大きい事実でしょう？」

「…………？」

アンリは疑問に思った。主君が、啓蒙思想を擁護するような言い方をしたからだ。表だって非難するような言いようは高貴な人間ゆえにしないものだが、これまでの観察や、父親が遺した、「教科書」から王や中央、そうあからさまにいうのは憚られるならば王国内の主流派、彼らに対して一歩引く立場を貫いてきたはずである。

「食べ物を育てるなんて卑しい仕事です。青い血の方々がなさることではありません」

青い血が体内をめぐっているはずの、賤民はそう恐縮して答えた。